仙台司教区 教区事務所だより

（第 51 号）
昭和57年1月1日

仙台教区、今後三年間の司牧目標

『家庭から社会にキリストの平和を』

―佐藤司教 年頭書簡で発表―

一九八二年の新しい年が明けた。内外の情勢はきびしく、決して穏やかな正月とはいえないが、それでもこの新しい年が平和であるように、また私たち一人ひとりの上に神の恵みがゆたかであるように祈らずにはいられない。さて年の始めに、「年頭司教書簡」が発表された。この書簡はこれまでの「四旬節教書」に代わり、仙台教区の年間司牧目標を示している。私たちは司教が全教区に提示したこの年間司牧目標にしたがって、神の国実現のために協力し合い、より熱心な信仰生活を実践しなければならない。

◇　◇　◇

「家庭から社会にキリストの平和を」

これが今年の司牧目標だが、実際にはむこう三年間のものとして定められた。仙台教区は一九八二年から八五年まで、教区をあげてこの目標に取り組むのである。佐藤司教は年頭書簡で、全教区民にいっそうの努力を訴えているが、各年ごとの実践に次のような示唆を与えている。

一年目。キリストの平和とはなにかをよく考え、それを家庭の中に実現するようにつとめる。信者家庭だけでなく、一人だけの信者でも、その家庭をキリストの平和でみたすように最大の努力をはらってほしい。

二年目。一年目の努力をもとに、小教区共同体、つまり教会内の信者同士、家族相互でのキリストの平和を実現する。誰の目にもキリストの平和にみたされた小教区教会をつくってほしい。

三年目。家庭や教会が真のキリストの平和にみたされているなら、必然的に社会に影響を及ぼしてゆくものである。これはキリスト者の使命だが、実現にはさまざまな困難がともなうものでもある。そうした困難を乗り切る方策を考え、キリストの平和を周囲の社会に及ぼしてほしい。

◇　◇　◇

年頭書簡に示された司牧目標は、教区がこ数年かかげてきたものの継続ともいえる。今後三年間、重点的に取り上げられるこの司牧目標には三つの要素がある。「家庭」の重要さは教区が特に指摘してきた。「キリストの平和」は福音の具体的内容であり、最も今日的な課題である。そして「社会に」向けられた姿勢は教会の本来のものといえる。昨年二月、初めて日本を訪れた教皇ヨハネ・パウロ二世が、その数々のメッセージのなかで日本の教会にのぞまれたものでもある。

司教の日程

（12月8日現在）

1月1日　新年の平和ミサ（元寺小路教会）
5日　聖ドミニコ女子修道会・終生誓願宣立式（仙台）
10日　聖ライムンド（修道名）のお祝い・新年会（元寺小路）
11日～13日　仙台カテキスタ会研修会
17日　石巻教会堅信式
19日　社会福祉法人理事会
22日　スペルマン病院理事会
27日～28日　神学校常任委員会

1982・年間目標

家庭から社会に
キリストの平和を
（仙台司教区）

説解

まず『司牧目標』の理解が必要

指導指針は司牧評に期待する

今年の年間司牧目標が決定した。今年だけのものではなく、今後三年間の継続目標としたのは、かけ声だけに終わらせず、腰をすえて取り組む意気ごみを示したものといっていい。書簡にあるようにこの決定には、教区司祭評議会の意見が採り入れられた。司教を助けて司牧の共同責任を持つ司祭団の、当然の役務である。

さて、目標が決まった次の問題は、この目標を目指してどのように教区が動いてゆくかである。司教書簡では、この司牧目標の重要さと、具体的示唆としての各年の行動計画が述べられているが、さらに目標をより容易に実践できるため、あるいは小教区教会の特色を生かすため、副題をもうけることがすすめられている。しかし具体的な実施計画、指導指針といったものは、三月二十一日に予定されている教区の司牧評議会で取り上げられることになろう。

これまで四旬節教書で発表されていた年間司牧目標が、今年は多少繰り上がって年頭書簡で発表されたのは、新年という意味合いのほかに、復活祭後の実質的な教会活動のための十分な余裕を見た結果でもある。年間司牧目標がどういうものであるかをよく理解することが大事なことはいうまでもない。結局はそうした学習が、信者一人ひとりの意識を向上させ、実践を容易にするとともに、教区そのものの活気を燃え立たせることにもなる。今年は六月に、教区の司祭大会が予定されているが、司祭の研修を主にした大会テーマとして、「平和」に関することが取り上げられている。これも年間司牧目標にかかわるものといえるだろう。

年間司牧目標は究極のところ、信者一人ひとりの自覚と実践にかかっている。いうまでもなく深い信仰が根底になければならないものだが、成熟した信者の養成ともいえよう。

1月1日・世界平和の日のテーマ

『平和は神からの賜物』

今年の世界平和の日（1月1日）のテーマは、「平和は神からの賜物」。平和の諸問題は特にいま真剣に考えられなければならない。すでに世界平和の日が教会のなかに設けられてから十五年。教皇がはじめて日本を訪問されたときも、その中心のひとつは、原爆の地ヒロシマから全世界に平和を訴えることだった。現実はそうした努力にもかかわらず、平和と逆方向に進んでいる世界のようにも思える。今年のテーマは、この平和について、それが人間の利害から生まれる打算的なものではなく、神からのもの、神ののぞみであることを思い出させている。永続する平和の基礎は、やはり、神にもとめるしかないことを教えてくれる。私たちも自分のものとして考えてみよう。（カトリック新聞10月25日号参照）

▲キリスト教一致祈禱週間1月18日～25日

『主こそ わがやどり』

毎年、1月18日から25日までは「キリスト教一致祈禱週間」。今年のテーマは、〝主こそわがやどり〟、東京をはじめ全国各地で、カトリック教会とプロテスタント教会の合同祈禱の催しがある。仙台では、18日に東一番丁教会（プロテスタント）で土井文雄神父が、25日に元寺小路教会で河本隆夫牧師がそれぞれ説教をし、教会一致を祈るエキュメニカルな集会をひらく。

なお仙台では、在仙キリスト教連合会の集会を1月1日午後2時から元寺小路教会で行い、佐藤千敬司教が講話の予定である。

＊＊落成を祝う

白河教会司祭館（グァダルペ会）

仙台教区の南の玄関口、グァダルペ外国宣教会が担当している福島県白河教会（白河市鷹匠町21・主任司祭ブランカス神父）の新司祭館が完成、昨年11月1日午後、教区長・佐藤千敬司教を迎えて盛大に落成式を行った。

新司祭館は二階建で延約百六十五平方メートル、工費は約千四百万円。矢吹巡回教会を担当するロペス神父と二人の司祭が住む。白河教会の信者は約百人だが、婦人会などの当番制で、賄いや教会の留守番などを奉仕している。

おめでとう！

叙階 二十五周年

土井文雄神父
鷹觜達衛神父

昨年末の12月20日に土井文雄神父、22日には鷹觜達衛神父が叙階二十五周年を迎えた。

土井神父は、おひげの神父様として親しまれている元寺小路教会主任司祭。暁星中学、上智大学と進み、昭和31年12月20日、元寺小路教会で司祭に叙階、元寺小路を皮切りに畳屋丁、津谷、また畳屋丁教会を経て昭和45年から再び元寺小路教会に赴任、今年で十一年目になる。その間昨年まで司教総代理を兼任した。いつの頃からか、土井神父様といえば、あの独特のひげがトレードマークとなったが、長年、宮城刑務所の教誨師としても奉仕しており、らいらくで人情味あふれたおやじさん神父として親しまれている。

鷹觜達衛神父は塩釜教会の主任司祭で、モンテッソーリの著書の訳者として知られている。出身は盛岡四ッ家教会で、初めは医者になるため岩手医科大学に学んだが、卒業後司祭への召命を感じ上智大学に入学。二年目にローマ・ウルバノ大学に留学。昭和31年12月22日司祭に叙階された。叙階後は、北五十人町教会、八戸・鮫などを経て現在は塩釜教会で四年目。その間教区立カトリック幼稚園の学校法人化に尽力。又、教会音楽のつどいのグレゴリオ聖歌の指導、絵の個展、テレビでスパゲッティ料理を自ら作り披露するなど、多趣味の神父さんとして話題に事欠かない。9月にはローマで叙階された同級生と二十五周年を祝うために渡印。張り切り神父様もインドの気候に少々グロッキー。スマートになって帰国したが、再びカンロクがついて元気に活躍中である。

教区目標の成果は？

岩手県信徒連絡会代表者会議開く

去る11月15日午前10時から、盛岡の岩手カトリック・センターで岩手地区信徒連絡会代表者会議が開かれた。この日は、司牧評議会の報告、教区目標の推進状況の報告、カトリック・センターの活動について話し合われた。

教区目標については、各教会とも熱心に取り組み、国際障害者年に当たっていた事もあり、障害者を理解するために講演会をしたり、ボランティア活動をしたり、それぞれ目標に向かって努力している事がわかった。

カトリック・センターの活動については、57年度は、コルベ神父の伝記映画「アウシュビッツ、愛の奇跡」の上映（4月6日盛岡県民会館ホール）、また三浦朱門氏の講演会を10月に予定している。

遠野教会が新築移転

ー市の都市計画に協力してー

岩手県・遠野教会（主任神父M・エンデルレ）と付属光の園幼稚園は、長年住みなれた新町から、遠野町17地割5番地7に新築移転、さる10月20日に教会献堂、および落成式を行った。

同教会および幼稚園は、遠野市の都市計画の事業に協力して移転することになり、昨年6月から新築工事をすすめていたが、このたび二百三十五平方メートル、木造モルタル二階建、総工費約一億円で完成したもの。幼稚園は、六百五十平方メートルの平屋建で四教室のほか職員室、遊戯室などがある。献堂式には、岩手県各地の教会からお祝いにかけつけ、献堂、落成を祝った。

新住所　遠野市遠野町17ー5ー7（TEL）遠野(2)3341

イメルダ幼稚園（八戸）新装成る

教区立で　学法第一号

八戸・塩町教会のイメルダ幼稚園（園長・児山六七男神父）は、旧園舎を取り壊し、4月から建築中であったが、さる11月3日落成式を行った。新園舎は、元の敷地内に建てられ、八百十一・三平方メートル木造モルタル一部二階建で総工費一億一千五百万円。

落成式には、教区長・佐藤千敬司教も出席し、八戸市長の祝辞などもあって、関係者多数が出席、新築落成を祝った。

教区立幼稚園は、学校法人化がすすめられているが、イメルダ幼稚園はその第一号として昨年4月、学校法人となった。

また、塩町教会も老朽化のためすでに取り壊され、三年後の新しい教会を目指して目下募金中。主日のミサは聖ウルスラ修道院の一部を仮聖堂として使用しており、一日も早く新聖堂ができる事を待ち望んでいる。

教会音楽の集い
第五回 演奏会
＜仙台＞

昨年12月6日(日)午後3時半から、元寺小路教会聖堂を会場に、教会音楽の集いのメンバーによる演奏会が開かれた。

初めにコレルリ作曲のクリスマスコンチェルトを藤倉宏文氏の指揮で演奏。次にグレゴリオ聖歌「ひとりご我らのために生まれた」を鷹觜達衛神父の解説と指揮で合唱。続いてクリスマス聖歌「しずけき」、「アデステ」の合唱、そして聴衆も参加して「諸人こぞりて」が、弦楽器とトランペット、ティンバニーも加わり一段の盛り上がりを見せて演奏された。

最後にモーツアルトのミサ曲「ミサブレウィス」を我妻恵氏の指揮で演奏され、共に神を賛美した。この合奏団は、昭和54年学生を中心に結成され、社会人、主婦も加わり練習に励んでいる。演奏会も回を重ね、年毎に安定してきており期待される。目下団員募集中である。

連絡先　我妻恵（仙台局(22)　4427）

日曜学校リーダー研修会
＜仙台＞

昨年10月25日、仙台教区司教館隣接の旧司祭会館で、仙台市内の七つの教会の日曜学校のリーダーの研修会が開かれた。今回は腹を割って話し合おうとの目的で、午前十一時からレクリエーションを皮切りに始まった。

ゲームや歌ですっかり打ちとけ、昼食の時大いに他の教会のリーダーと話し合い、交流することができた。

午後からは二人のリーダーから話題提供があり、それをもとにグループに分かれディスカッションが行われた。グループの話し合いでは、今の日曜学校のあり方が話され、特にかつては信者の子どもの宗教教育の場であったのが、信者でない子ども達が多くなり、そのため日曜学校の性格も変わって来ていると

いう事である。又、子ども達の様相も時代と共に変わり、リーダーと子どもとのより深い人格的交わりが要求されると話し合った。

各グループの話し合いのまとめが発表された後、昼食からずっと一緒に参加して下さった三浦平三神父から、「日曜学校は、教会の中でも最も大切な仕事なので、教会共同体全体でかかわっていくように」と話され、「がんばって下さい」との励ましの言葉をいただき、実り多い一日を終了した。

〃アコロ〃
アフリカ難民救援街頭募金を行って

元寺小路教会　佐井満雄

今、アフリカ大陸は、飢える人々で溢れる飢餓大陸と化している。一冊の雑誌でこの事を知った我々元寺小路教会の青年は、他の市内教会の青年たちの力も得て、去る11月15日正午から午後4時まで、一番町、中央通りを中心に街頭募金を行った。参加者約四十人、募金総額十八万三千八百九十円、予想外の高額。しかし、現在のアフリカには、少なく見積もっても百十四億六千万円は必要と言われる。我々の力はごく微々たるものに過ぎない。しかし、この活動は、アフリカ難民の方々への資金援助だけが目的ではなく、最たるものは彼らと我々青年がつながりを持つことであり、そのきっかけを作る行動になったのではないだろうか。満たされなければならないのは、肉体以上に心のはずである。直接、彼らの力になれる時が来たのなら、それは最高の喜びであり、そうなることを祈りたい。

〃アコロ〃「食べるものをくれ!!」と訴える声は今もアフリカの大地に鳴り響く。平和とはどういうことか、自問自答して欲しい。あなたの心の内に、家庭に、学校に、職場に、社会に、そしてこの世界に……。平和とはまさに、私たちの手で勝ち取って行くものではないのか。アフリカのみならず、アジアにも飢餓ははびこり、それも不義のためにだ。

これから我々青年には、広い世界的視野に立つことが要求されそうだ。仙台教区のすべての青年のみなさん！教皇様来日の際のあのメッセージを思い起こし、力を合わせ、平和のために働こうではないですか。

＊アフリカ難民救援寄附金付きのトレーナーを販売します。色は紺、胸に白で「ΙΧΘΥΣ（ギリシア語で魚の意）」左上腕に十字架のデザイン。お申し込み、詳細は、各教会の主任神父様へ。価格二千五百円。

読者のページ

黙想会　二題

六十路を越えて

北仙台教会　鮎沢美恵（62歳）

穏やかな晩秋の二日間、雑木林の中にある高原の修道院で、沢田和夫神父指導の黙想会に参加した。

マタイの福音書を輪読。そして神父様の一言、二言。沈黙の中での神父様の言葉は、説明とか指導ではなく、共に頂く、という形である。

「黙想会は、書いたり記録したりするものではありません」と言われた。最近、記憶力の減退に悩む私は、出席できない人のためにと理由をつけ最後まで忙しくペンを走らせた。ところが、一か月後の今になっても一度もその手帳は開かれていない。しかし不思議な事に神父様の言葉が声を伴ってボッン、ボッンと、しかも鮮やかに浮かび上がってくる。仕事の時、独りの時、聖書を読んでいる時・・・・私の内で何かが起こり始めている。

以前は、どんなに耳の傍らで黙想会を知らされても、時間の拘束を理由に参加しなかった。

今、六十路に踏み込み、多少の健康と時間に恵まれ、ようやく黙想会づいて？短い余生だからこそ、一層拍車をかけなければと、春、秋とも参加した。いや、できた恵みを感謝している。沢田神父様は、こう言われるでしょう。

「神のお言葉は、形やノートではなく心で頂いて下さい」と。

典礼を中心にして

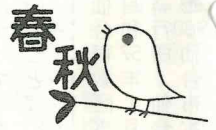
元寺小路教会　佐藤正一

11月1日(日)、国井神父（御受難会）指導による典礼に関しての黙想会が開かれた。ミサがカトリックのシンボルであるとの語り出しで、ミサの生い立ち、将来について話を進められ、ユダヤ教を背景にして会堂の典礼が、「言葉の典礼」として受けつがれ、家庭の宗教的会食が「感謝の典礼」に発展する過程を分かりやすく筋道を立てて説明された。

今まで、典礼について多くの講話を聞いたりそれに関する書籍を読んだが、何かもう一つピンとこないものがあったが、国井神父の熱のこもった明快な講話を聞いて目の前が明るくなったような気がし、神に感謝している。

初代教会では、み主の十字架上の死と復活を記念するため、食卓を囲み、「パンを裂く」という言葉を使って典礼を続けた。確かに典礼は司祭だけのものではない。信者は見るだけ、聞くだけ、祈り文を読むだけではない筈である。典礼の中心は神様であり、その神の働きかけに答えるのが、われわれ共同体である。キリストに結ばれた行為、その現われが教会の典礼行為となる。私達は、パウロのものでも、アポロのものでもない。キリストに結ばれた共同体であり、キリストにおいて兄弟である。

集まろう。一つに集まるところに、神は、おられる。



「先生、神さまは、いつもぼくたちのこと見ててくれるの？」

一年ぼうずのA君が聞く。

「そうよ、いつもいっしょにいて、見ててくれるのよ」と答えると、彼は赤いほっぺをもっとまっかにして、

「うわぁ、ぼく、はずかしいなあ」と、いかにもだれかに見られてでもいるように言った。

私は、神さまを、これ程身近に感じている人に今まで出会ったことがない。

「先生、聖書がほしいの」という小学三年生のB子のたのみに、買ってきてあげて半年もたったころ、「この字なんと読むの？」とヨハネ十五章の一節の字を指さす。私は驚いて「Bちゃん聖書読んでるの」と聞くと、「毎日少しずつ読んでるの。ここまで読んじゃった」と事もなげに言う。私は、頭をガーンとなぐられたような思いをさせられた。

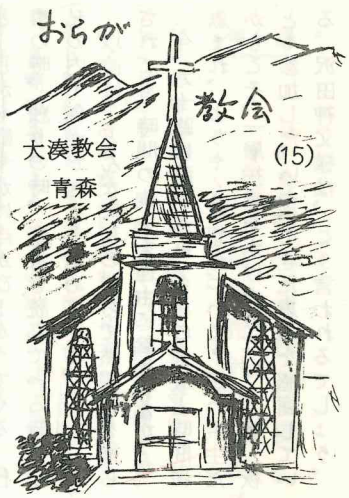
子どものこのファイトは一体何だろう。

子ども達が初めてキリスト教と出会う時、それは、教えではなく、キリストそのものに子どもなりに出会っていると思われる。

子どものやわらかい土のような心は、みことばそのものを、ぐんぐん吸収してしまう。

それは、大人にはまねのできないものなのだ。子ども達と一緒にいる時、どれ程神を体験させてもらえることか。

新しい年が始まった。とりわけ子ども達と共にいて下さる主よ、今年もまた、彼らを通して、あなたを示して下さい。（O）



本州さいはての教会、大湊教会は、昭和30年ケベック外国宣教会のアルマン・ボワール神父、ルシェン・ボリュー神父の努力で、一人も信者がいないところから出発しました。

当時、その近辺には明治末期に設立された日本キリスト教団田名部教会があるだけで、大湊教会は、下北半島に二つ目のキリスト教会誕生ということになります。

最初、司祭は民家に住み、町に出かけては、片言の日本語で道行く人に声をかけ、福音の種子を蒔いて歩いたそうです。見知らぬ土地で、それも片言の日本語での宣教は、並大抵のことではなかったでしょう。しかしその後、幼稚園の設立、田名部と、横浜町国立病院にそれぞれ集会所が開設され、町の人たちとの接触の場が持たれるようになりました。聖堂も母国カナダの信徒の浄財で建てられたロマネスク風のいかにも教会堂という風な建物です。（現在は幼稚園として使用されています。）

昭和33年には聖母被昇天修道女会の修道院が開設され、修道女五人の協力で幅広い布教活動が展開されました。大湊教会の基礎は、この時代に築かれたといえるでしょう。

大湊は、まさにさいはてに位置し、野辺地から大湊線に乗り換えると、この先に人が住んでいるのだろうかと思われるような、辺ぴな所を汽車は行きます。しかし、その先に大湊は、あります。釜伏山に抱かれ、駅から歩いて十分、海に面して真っ白な十字架の輝いているのが、おらが大湊教会です。

芦崎湾には白鳥が舞い、海に向かって陣丸滑行釜伏山スキー場があり、今年はリフトも二台目ができ、スキー客でにぎわうことでしょう。釜伏山頂上からの展望は、まったく素晴らしく、北は北海道まで一望のもとに見られます。この素晴らしい、しかし厳しい自然の中で、ケベック宣教会の司祭たちのまかれた種子は、たくましく育ってきました。

昭和50年9月、教会火災という突然の出来事に、ただおろおろするばかりの信者の心をしっかりまとめ、バイタリティーに富んだがんばりで信者のけん引力となったのは、十代目の主任・横島健二神父でした。この試練を信者一同心を一つに団結し乗り越え、多くの人たちの協力を得て、昭和51年12月、新聖堂の完成を見ることができたのです。

教会内の活動では、教会を中心に各地域別に家庭集会が行われ、各地区の集会には信者でない方がたも出席し、なごやかです。

今まで聖母被昇天会の修道女たちにまかせられていた日曜学校は、修道院の移転と共に信徒の手にまかせられ、現在軌道に乗った感じです。中学生は司祭の教理研究会に入り、聖書の研究にはげんでいます。

昭和48年6月から発行された教会報「はまなす」は、毎月約九十部発行されており、現在八十七号で内容も充実してきました。

信者数は、百三十七人と多くはありませんが、クリスマスには、さほど大きくない聖堂は人であふれるばかりになり、大湊には、こんなに信者がいたっけ、とうれしい悲鳴をあげています。この日ばかりは、大湊の町中の人たちが皆信者になったかのように教会にやってきます。このクリスマスのつどいが、せめて一つの信仰のともしびとなればと、心から祈っています。

創立以来二十六年が過ぎ、その間の神さまのお恵みを感謝して新たな一歩をふみ出したばかりの大湊教会です。

（信徒会副会長・大釜正満記）

【編集後記】◉明けましておめでとうございます。今年も紙面を通してコミュニケーションの場となる事を願っています。ご協力下さい。◉〝たより〟の編集に二人の大学生が昨秋から参加！新鮮な意見が反映される事を期待!! ◉「祈り求めるものはすべてかなえられるものと信じなさい」とのみことばに励まされて一月号の編集完了(O)

仙台司教区事務所だより
昭和57年1月1日発行
発行所　仙台司教区事務所
〒980仙台市本町一丁目2番12号
TEL 0222 22 7371